

jozai ryoju sen

常

在  
靈  
鷲  
山

vol. 4

秋

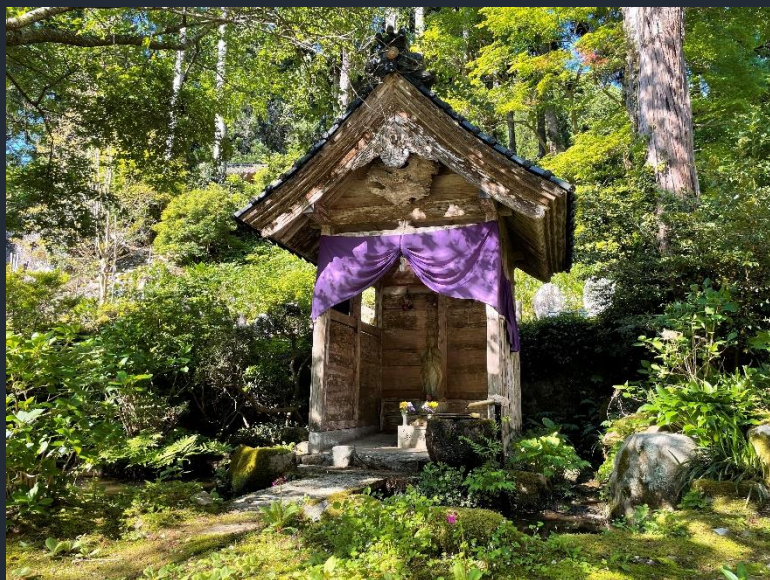
常  
在  
山  
本  
土  
寺

令和5年11月1日



季節を書き散らす

## 隠れた心の拠り所 『浄行堂』を紐解く



### 境内の一角に佇む浄行堂。

堂内には石造りの「浄行菩薩」が安置されています。

水場ということもあってか、周囲には季節ごとに様々な草花が生き茂り、目を楽しませてくれます。

堂内奥には、かつての参拝者によって奉納された手毬や人形が掛けられており、往時の人々の想いが時空を超えて伝わってくるようです。



コロナウィルスが第五類に移行してから初めてのお盆となった今年の八月。特に八月十三日から十五日にかけての三日間は、身が焦げるような炎天下だったにも関わらず、本当に沢山の方々が、近郊はもとい遠路からも墓参にいらしておいりました。「四年ぶりによくやく本来のお盆が戻って来たなあ」と、一人感慨にふけていた次第です。

今年はお盆期間中に法事の申込もあり、本堂と庫裏を行ったり来たり、バタバタしておりました。廊下を走りながら、境内を行き来する墓参の方々に目をやっていると、ふと気が付いたことがあります。みなさん、ベースはお墓と位牌堂へのお参りなのですが、思いのほか「浄行堂」で手を合わす方が多いのです。しかも、ご年配の方はばかりではなく、私と似たような年の方で単身お参りしている方もいらっしゃいました。

浄行堂はその名の通り、「浄行菩薩（じょうぎょうぼさつ）」（通称「浄行様」）をお祀りしています。昔から、浄行様の御尊像にお水を掛けて、タワシ等でお身体を磨いてさし上げるのが、お参りの際の習わしです。その際に、怪我や病気で調子の悪い部分にあたる箇所をタワシで擦りながら祈願すると、御利益で怪我や病気が治癒する、という言い伝えもあります。みなさんも耳にしたこと、ありませんか？

今年のお盆に浄行様をお参りしていた方々も、例に漏れずタワシでゴシゴシと浄行様のお身体をきれいに磨いておいりました。「昔からの言い伝えや信仰が、意外にも人々の間に根付いていて、しっかりと継承されているのだなあ」と、しみじみ感じ、そして少し嬉しく思ったお盆の三日間でした。



## ● 浄行菩薩とは何者か？

ところで、そもそも浄行菩薩とは、どういったお方なのでしょう？「菩薩(ぼさつ)」とは「利他の行い」を中心とする「六波羅蜜(ろくはらみつ)」の修行に励んでおられる方々です。数にして八万四千あるといわれる佛教の経典には、固有のお名前を持った菩薩様が数多く登場します。「観世音菩薩(かんぜおんぼさつ)」や「弥勒菩薩(みろくぼさつ)」のお名前は、一度は耳にしたことがあるのではないのでしょうか？

浄行菩薩は、数多くある経典の中でも、日蓮宗が一番大事にしている経典『法華経』の第十五章「從地涌出品」に登場する菩薩様です。この章のテーマは、お釈迦様亡き後に、この娑婆世界で『法華経』を弘める担い手(＝弘教者)についてです。数多の菩薩様たちが、そのミッシヨン(＝滅後弘教)の担い手として名乗りを挙げるのですが、お釈迦様はそれらを制止します。そして、お釈迦様が呼びかけると、それに応じるように、突如として大地が揺れ、無量千万億という途方もない数の菩薩様たちが、地面の割れ目から出現します。

そんなドラマチックな登場の仕方から、これら数多の菩薩様たちは「地から涌き出た菩薩様」ということで、「地涌(じゆ)の菩薩」と呼ばれています。大工さんには必ず棟梁(とうりやう)親方がいるように、地涌の菩薩様たちにも、リーダー格の菩薩様が四人(＝四菩薩)がおりました。お名前を①上行菩薩、②無辺行菩薩、③浄行菩薩、④安立行菩薩といえます。浄行様は、この四菩薩の一人なのです。四菩薩には「地」「水」「火」「風」の



浄行堂の入り口横に設置してある石製の手水鉢。

今ではすっかり苔むしていて、一見すると何の変哲もない手水鉢なのですが、元々は石臼として使われていた器なのだとか。

お参りの際は、手水鉢のお水を浄行様におかけしてから、たわしてお身体を磨いてさし上げてください。

## ● なぜ地面の中から出現されたのか？

お経文には、「地面の下の虚空に居て、お釈迦様の呼びかけに応じ、大地の中を貫いて出現した」とあります。いくら菩薩様でも、地面の下で待機していて、地面を突き破って登場するのは些か不思議ですが、実はこのシーンにはとても深い意味が込められているのです。虚空というのは「理想の世界」を表し、地面というのは「現実の世界」を表しています。「本来、みんなが仏であって、この娑婆世界こそが浄土に他ならないんだ」というのが『法華経』の説く理念であり理想ですが、残念ながら、現実の世界の様相とはまるでかけ離れています。この現実世界に『法華経』の理念を実現することは、ぶ厚い地面を突き破るくらい困難なことです。しかし、だからこそ「やらねばならぬ」のです。困難なことだからこそ、そこにやる意義があるのです。これこそがお題目の「心」であり、その信仰のゴールに他ならないのです。

私たちは数多の地涌の菩薩の一人に他なりません。そのことを心にとっかりと刻み込んで、大地を貫くが如き心持ちで、南無妙法蓮華経のお題目をお唱えして行きましょう。



お寺の行事アレヤコレ

## 『御会式』を知る

### ●「御会式法要」とは？

十一月九日は当山の「御会式法要」です。みなさまご承知の通り、「御会式」とは日蓮宗の開祖である日蓮聖人の御命日を偲ぶ法要です。ですから、日蓮宗寺院の年間行事の内が一番大切な行事であると言っても過言ではありません。

日蓮聖人の祥当の御命日は十月十三日。日本全国の日蓮宗寺院では、この日を前後して御会式が営まれております。特に有名なのは、東京都大田区池上にある本山「池上本門寺」の御会式ではないでしょうか。前日の十二日は「お逮夜」と呼ばれ、「万灯練供養」が盛大に執り行われます。境内をたくさんの方灯行列が練り歩く様子は、まさに壮観です。

### ●日蓮聖人はどこで亡くなられたのか？

日蓮聖人が六十年の御生涯を閉じられたのは、今日から遡ること七十四年前、弘安五年（一一八二）十月十三日のことです。聖人が晩年を甲斐国波木井郷身延（現・山梨県南巨摩郡身延町）で過ごされたことは有名ですが、実はお亡くなりになられたのは、身延から直線距離で一八キロも離れた武蔵国千束郷（現・東京都大田区池上）の地頭、池上宗仲（いけがみむねなか）公のお屋敷でした。一体何があったのでしょうか。日蓮聖人の最晩年の動向から紐解いてみましょう。

### ●身延山と日蓮聖人

文永十一年（一一七四）春、佐渡流罪を赦免され、鎌倉に戻った日蓮聖人。しかし、それから間もなく鎌倉を離れることを決意されます。各地を転々とする旅の途上、甲斐国波木井郷（現・山梨県南巨摩郡身延町）の領主であった波木井実長（はきいさねなが）公の招きに応じて、波木井郷の一画にあった身延に入山されました。

当初、身延に定住するつもりはなかったのですが、当地をいたく気に入られた聖人は庵室を設け、実に足掛け九箇年に亘ってお過ごしになります。しかし、居住に快適な場所であったかと言いますと、決してそんなことはありませんでした。

入山間もない建治三年（一一七七）の年末頃から、断続的に胃腸系の病に悩まされます。この頃のお手紙には「不調の為、筆も満足に執ることが出来ないと」あり、病気が重篤であったことが伺えます。医師の心得があった信徒の四条金吾（しじょうきんご）の投薬により、一時的に小康状態となりますが、残念ながら完治することはありませんでした。

今でこそ、身延山久遠寺の門前町として賑わう身延町ですが、日蓮聖人が入山されるまでは「蓑夫の沢」と呼ばれ、地元民も滅多に足を踏み入れることも無い辺境の地でした。おまけに「春の花が夏に咲き、秋の菓は冬に実る」と形容されるほど寒冷な土地であったと言います。天候不順による全国的な食糧不足

日蓮聖人がお亡くなりになる

2日前の10月11日。

枕元に「経一丸」という年の端13歳の少年を呼び寄せ、自身が成し得なかった京都での布教を託しました。この少年は後に長じて「日像」と名乗り、艱難辛苦の末に後醍醐天皇から宗旨公認の「繪旨(=命令文書)」を賜ります。何を隠そう、この方こそ当山の開山人「龍華樹院日像上人」その人に他なりません。当山創建の第一歩は、実はこの時に踏み出されたのです。

### ●身延離山とご入滅

徐々に衰弱して行く聖人のお身体を心配した周囲の勧めもあって、病氣療養のために身延を離れることを決意します。

弘安五年九月、身延を離山した聖人は、常陸国隄井(現・茨城県水戸市加倉井町)の温泉を目指して旅に出ます。

しかし、その途上、九月一日に武蔵国千束郷の地頭、池上宗仲公の屋敷に到着した時点で、ついに身動きが取れなくなってしまう。休息のためこの地にしばらく滞在することになります。自身の死期を悟った聖人はこの地を入寂の所と定め、十月八日には自身の滅後、教団を担って行く後継者として六人のお弟子を指名します。さらに十月十日にはご自身の御遺物を弟子・信徒の方々に分与されたことが記録に残っています。次いで翌十一日には枕元に「経一丸」という年齢十三歳の少年を呼び、自身が成し得なかった京都での布教を託されました。この少年が後に長じて「日像」と名乗り、石川県能登半島一帯を教化して回ったお話しは、また別の機会にしますね。

そしてついに十月十三日午前八時、弟子・信

徒たちが見守る中、読経の声に包まれながら日蓮聖人は入寂されました。この時、地面が大きく揺れたとの記録が残されています。

聖人の御遺骸は翌十四日午後八時に納棺されました。十五日午前〇時に葬送の儀がしめやかに執り行われ、池上の西谷で茶毘に付されました。現在、この茶毘所の跡地には朱塗りの宝塔が建っております。池上本門寺にご参詣の折は、是非とも足を運んでみてください。

生前、日蓮聖人は「墓をば身延の沢に建てるべし」と、ご自身の墓所を身延の地に建立するように御遺言しておりました。初七日の法会が営まれた十月十九日、その御遺言に従って御遺骨は池上を発ち身延へと運ばれました。二十三日に無事身延に到着し、二十六日に二七日忌の法会が営まれた後に墓所へと納骨されました。現在、身延山の御廟所には大きな祖廟塔が建っておりますが、この中に墓所創建当初の墓石である五輪塔が納められているとのこと。

日蓮聖人は常陸国へ向かう途上、身延でお世話になった波木井実長公に向けて、人生最後となるお手紙を認めております。その内容からは、再び生きて身延の土を踏みたいという強い思いが伝わってきます。それだけに旅の途上で入寂された聖人の無念たるや如何ばかりだったでしょうか。

先述した通り、御会式法要は日蓮聖人への報恩の法要です。しかし同時に、日蓮聖人がどのような想いで晩年を過ごし、最期の時を迎えられたのか、是非ともそういった部分にも思いを馳せつつ、法要に臨んで頂ければと思います。



## 年中行事のご案内

十月	十三日(金)	午前十一時半	御講
十一月	九日(木)	午前十一時 午後一時半	祠堂法要 御会式
十一月	二十六日(日)	午後二時	徳前御会式
十二月	十三日(水)	午前十一時半	像師講
	三十一日(日)	午後十時	除夜の鐘
一月	一日(月)	午前〇時	新年祝禱会
二月	四日(日)	午後一時	星祭

お誘いあわせの上、ご参詣ください。



表紙の写真

「秋海棠(しゅうかいどう)」

毎年9月を過ぎると咲き始める秋海棠。ピンク色の可憐な花には派手さこそありませんが、凛とした気品ある佇まいが何とも秋らしい。暑さに弱く、今夏の規格外の暑さが原因で枯れてしまった株もありましたが、本堂裏の株は奇跡的に夏を乗り越えてくれました。個人的には位牌堂に続く階段から眺めるのが一番綺麗かと。みなさまも是非ご覧あれ。

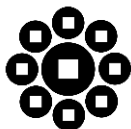
## 【編集後記】

おかげさまで、寺報『常在靈鷲山』秋号も、なんとか発行に漕ぎ付けることが出来ました。

今回から二頁増えて六頁構成となります。しばらくは、この形態で続けたいと思いますので、よろしくお願い致します。

昨今、「電子書籍」が当たり前の世の中になりました。今や漫画は雑誌や単行本ではなく、スマホやタブレットで読む時代です。最近はこちらに進んで、ビジネス書や小説をラジオ感覚で聞き流すサービスまであるそうです。「ながら読み」ならぬ「ながら聞き」を可能にする素晴らしいサービスですが、これも「タイパ(＝タイムパフォーマンス)」を重視する現代社会の世相を色濃く反映しているような気がしてなりません。パラパラとページをめくりながら、じっくりと時間をかけて読む必要のある活字媒体は、これだけ慌ただしい現代社会には馴染まない、ということなのでしょうか。

しかし、そんな時代だからこそ、忙しい時こそ、矛盾するようですが、立ち止まる時間を作ることは、とても大事なことなのです。その立ち止まる時間を作る手段の一つが「活字を読むこと」だと私は考えております。紙に印刷された文字媒体をじっくり読んで味わうこと。「スマホでも出来るじゃないか」ということを敢えてアナログな手段ですることに意味があると思うのです。本誌が万分の一でも、その一助となれば、編集者冥利に尽きるというものです。



常在山本土寺寺報『常在靈鷲山 Vol.4』  
発行所 常在山本土寺 編集 法花堂正匡  
〒929-1601  
石川県鹿島郡中能登町西馬場二部三番地

電話 0767-72-2235  
FAX 0767-72-2281  
ホームページ  
<https://www.jozaisan.org>

